

第1回滋賀県産業振興審議会 会議議事録

1 日時

平成30年12月27日（木）13時30分～16時15分

2 場所

コラボしが21 3階 大会議室（滋賀県大津市打出浜2番1号）

3 出席委員

【委員】安達 みのり委員、飯田 敏之委員、大日 常男委員、大島 節子委員、
上村 透委員、小玉 恵委員、西藤 崇浩委員、島 裕委員、高橋 康之委員、
田口 一江委員、田中 弘美委員、田中 美咲委員、辻田 素子委員、
夏原 行平委員、平尾 道雄委員、廣川 能嗣委員、松井ライディ貴子委員
（18名中17名出席）

【オブザーバー】滋賀経済団体連合会（4団体）、公益財団法人滋賀県産業支援プラザ、
滋賀県市長会、日本労働組合総連合会滋賀県連合会

【県】三日月知事、江島商工観光労働部長、辻井商工観光労働部理事、他関係職員

※ 敬称略、五十音順

4 内容

■開会

（1）知事あいさつ

- ・正式に諮問し皆様方にご議論いただく「滋賀県産業振興ビジョン」は、平成27年3月に策定され、10年間のビジョンとして活用している。
- ・後ほどこれまでの振り返り等を事務局からさせていただくと思うが、この間にいろんなことが変化してきており、これから先も大きく変化していくことが予想されるので、この間の一定の総括をした上でビジョンの改定を行おうと考えている。
- ・滋賀県では、来年度から2030年を展望する県の最上位の計画「基本構想」を新たに作り直して、滋賀県づくりを改めて強力に推し進めていこうとしているところ。
- ・「基本構想」の中には、国連の新たな開発目標であるSDGsの視点や項目、さらには技術革新等が起こっているため、変化を前向きに捉え「変わる滋賀、続く幸せ」という基本理念を視野に構想を作り、様々な施策に反映させていきたいと考えている。
- ・今回の「滋賀県産業振興ビジョン」の改定を考えるにあたり、私からいくつかの考え方を申し上げ、後の議論に参考にしていただければと思う。

・今、滋賀県は「天の時」、「地の利」、「人の和」があることを再確認しなければならないのではないか。

・「天の時」であるが、来年は平成から新しい時代が変わる。ラグビーワールドカップを始め、東京オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズ、全国植樹祭、滋賀県での国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会、大阪・関西万博といったビッグイベントがある。それらを活かし、その中にしっかりと参画していくことを志向していきたい。

・「地の利」であるが、琵琶湖を始め自然豊かな環境、様々なインフラが他の県から羨まれるほど整っており、さらにそれらを向上させていく計画もある。同時に、ものづくりの力、中小事業者の技術力を始め、層の厚い、幅広いものづくりの力が滋賀県にはある。大学もある、世界に誇るグローバル企業の工場や事業所などもある。地の利を活かしながら、こういったものを「滋賀県産業振興ビジョン」にさらに強く反映させることはできないだろうか。

・「人の和」であるが、滋賀県は全国で3番目に若い県であることと同時に、全国で最も長生きできる県であることを基礎としながら、来年度以降は、「世界」に開かれ、「世界」とつながり、「世界」から選ばれる滋賀を作ろうとしている。

・例えば、入管法改正に伴う多文化共生の視点をさらに強力でプランやビジョンを作り、体制をしっかりと整備して、世界各国の方の働きやすさを滋賀県として作っていかうと考えている。

・こうした「天の時」、「地の利」、「人の和」、是非新たなビジョンの中に議論を踏まえて埋め込んでいくことができないだろうか。

・最後に、「産業」とは何を指すのかについても議論いただければと思う。

広辞苑を引くと、

①産業とは生活していくための仕事、なりわい、生業という意味とともに、生産を営む仕事、自然に人力を加えて使用価値を創造し、また、増大するため形態を変更し、これを移転する経済的行為。

②工業。

と書いてある。

・ややもすると、私たちは商工業のみを対象としすぎてきたかもしれない。農業や福祉、環境、スポーツ、文化との関係等新たな「産業」というものをどう形作っていけば良いかをみなさんと一緒に考えられないか。

・行政の作文に終わらせたくない。作ったものが具体の政策となり、予算として、事業として進められることを前提としたビジョンを作っていきたい。

(2) 委員等紹介

・事務局より委員等の紹介が行われた。

(3) 会長および副会長の選任

- ・会長に廣川委員、副会長に大日委員が選出された。

(4) 滋賀県産業振興ビジョンの改定について（諮問）

- ・知事から廣川会長に諮問が行われた。

■議題

(1) 会議の公開について

(資料3および資料4に基づき事務局から説明)

- ・異議なく了承された。

(2) 滋賀県産業振興ビジョンの改定について

(資料5および資料6に基づき事務局から説明)

(3) 滋賀県産業振興ビジョンの中間総括について

(資料7、資料8および資料9に基づき事務局から説明)

(会長)

- ・それでは、議題2および議題3全体を通しての意見交換、議論の時間としたいと思う。
- ・特に、今回は、各委員の皆様が初めて顔を合わせる場でもありますので、できましたら、まずは一言ずつご発言をいただければと思う。
- ・それぞれの事業活動やお取組に関して、簡単にご紹介いただきながら、県の産業振興という視点から、資料7の中間総括の9ページや10ページの「今後の検討のポイント」等を含めて課題やその施策のあり方、経済の将来像などについて、その思いやお考えを簡単にお聞かせいただければと思う。

(委員)

- ・子育て応援団体チアーズステーションの代表として活動している。
- ・最初、スキルやキャリアを持っている母親にたくさん出会い、趣味の手作り市を開催していた。
- ・そこから開業を希望する女性たちが増え、創業支援をチアーズステーションでも行うようになった。子育てにより、社会との孤立を感じ、社会への参画に隔たりを感じる等ブランクのある女性にどういう未来を描きたいのかライフデザインや、社会で生きるためのコミュニケーションの提供や、精神的に自立をするための勉強会も行っている。
- ・甲賀市や商工会は開業支援であり、私たち民間との連携がうまくいき、3年前から開業

希望の女性が個人事業として伸びている現状にある。

- ・個人事業としては、事業をどう継続していくかが今後の課題。
- ・民間、行政、支援機関等の個々の支援ではなく、それぞれがいかに連携してサポートできるかが課題。

(委員)

- ・「基本構想」案の第4次産業革命は、経済活動関連なので関心事ではある。
- ・製造業を代表するトヨタは、人々のさまざまな移動を助ける会社、モビリティ・カンパニーにシフトしている。
- ・パナソニックも家電だけではなく、様々なソリューションや新たな価値を提供することにビジネスの軸足を変えている。事業はいつまでも同じようにはいかない。中国の深圳やアメリカのシリコンバレー等のスピードに自前主義では追いつかない。産官学含めた提携・連携をはじめとしたビジネスモデルを行う必要があるのではないかと直近の危機感として持っている。
- ・滋賀県基本構想案では2030年までの12年間についての案であるが、12年先はわからない。毎年社会・経済の環境が変わり、基本構想もその都度変化していくと思うが、弊社では1年間のアクションプランである。12年先のことはわからないので、時間軸が長いように感じた。

(会長)

- ・皆様の事業活動の取組等について御紹介いただき、次回からの参考にしていきたいと思う。

(委員)

- ・滋賀で取り組んでいるSDGsについては、弊社は「水・エネルギー・環境」で取り組んでいる。
- ・琵琶湖の負担にならない排水処理の技術開発について取り組んでいる。工場排水を毎日1,200トン放流している。工業用水の使用量は2,200トン。イオン交換用設備を使用し、毎日1,000トンを再利用し、琵琶湖の環境に配慮し、日々操業している。
- ・SDGsで言えば、「目標7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「目標12 つくる責任 つかう責任」である。
- ・SDGsの目標に「電気使用量の削減」というものがあり、国の補助金を活用し、LED照明に切り替えている。
- ・補助金は中小企業にとってはモノづくりや環境を整えていくうえで必要になってくる。今後整備も必要になるのではないかと。
- ・滋賀県中小企業新技術開発プロジェクト補助金は、もっとPRしていただいてはどうか。

・5つのイノベーションにある「商い・おもてなし」についての面であるが、大津市は34万人の人口である。一方、弊社工場のある山梨県の甲府駅は、大津市の約半分の19万人であるがすごく活性化している。弊社のお客様から「県庁所在地なのに大津の駅は普通の駅と変わらず寂しい。」との声を聞く。これから先「変わる滋賀」を掲げていくのであれば、駅も県の玄関口として魅力があるような場所になる必要があるのではないか。草津駅の方が発展している。

(委員)

- ・今回の審議会は、ビジョンの改定が目的と伺っている。知事が「作文で終わらせたくない。」と発言していたが、今までの物を見た感想は、ぼやっとしているので、もう少し定量的な目標を明記できないか。企業ではシェア等の目標を掲げている。
- ・定量的な目標で言えば、企業での給料や雇用面において中堅企業の貢献は大きくない。大企業の滋賀での活動における目標、滋賀に本社を置いている企業における目標など、産業ごとに目標を分けて産業を振興していくビジョンにする必要があるのではないか。
- ・どこまでできるかわからないが、定量的な目標が盛り込めないか。

(委員)

- ・知事のおっしゃった「天の時」、「地の利」、「人の和」をどう反映していくかを考えた。中間報告を聞きながら、ビッグイベントをどのように活かしながら参画していくのか、環境の部分で滋賀県をどのように活かしていくのか、若い人の人材育成や高齢者の経験をどう活かしていくのかと感じた。
- ・弊社は、「ふるさと魅力向上」で名を連ねているが、「持続可能な農」に若い方々が未来を見据えていただけるようになったと実感している。
- ・他にないモノがあれば、世界を目指していける滋賀になるのではないか。

(委員)

- ・資料7の3ページ「開業率・廃業率」について、平成27年度の廃業率は全国ワースト一位という数字が出ていた。
- ・最近では事業承継やM&Aが増えており、弊行では滋賀県内の企業の継続発展をサポートしている。
- ・エコビジネスマッチングフェアでは、商談件数734件等新たなビジネスが創出されている。ウィルステージもSDGsに絡めた取組である。
- ・10ページの第4次産業革命のポイントの記載があるが、常識が覆される時代にモノづくりができるのかどうか、その中で何に取り組む必要があるのか、我々も危機意識を感じている。
- ・平成27年度のビジョン策定以降、デジタル化が大変なスピードで進展している。最近の

流行言葉で「デジタルトランスフォーメーション」がある。新たな価値を生み出す、従来の技術・組織を変革することが、知事の発言にある「変わる」になるのではないか。

・2030年にはデジタル市場が半分になると予測されており、今後は大企業のみならず、中小企業、ITベンダーもデジタル化が経営課題になってくる。

・実現にあたっての大きな課題が、IT人材の育成・確保である。特にIT人材は新規も採用は容易ではない。そのため自社の既存の人材に新しいスキルを学び直してもらう必要がある。県の産業として、例えば県立高校でIT専門の部門を設けることや、各企業でITを学び直す制度を設けるなどしないと、「デジタルトランスフォーメーション」の2025年の崖と言われている中、2025年以降に約12兆円の経済損失が生じる試算もある。ビジョンの中に「デジタルトランスフォーメーション」への取組とIT人材の育成・確保を入れてほしい。

(委員)

・企業のオープンイノベーションの支援に携わっている。ここ3年でどのような変化があったのか振り返ると、SDGs、Society5.0という言葉が、政府だけでなく経済界、社会の中でもよく語られるようになった。SDGs、Society5.0の基本的な考え方は「インクルーシブ」という言葉に表現されている。いろいろな方がアクセスできる、多様性を認めていくことが背景にある。従来型のビジョンは「一つの目標に向かってみんなで進んでいこう」であったが、SDGs、Society5.0時代はそうではなくて「共感をみんなで積み上げていく」ものではないかと考える。

・SDGsについては飢餓、水不足など日本では実感できない問題が多く取り上げられている。社会的な課題をいかに腹落ちさせるか、イノベーションを生活の中で実感する、そうした中から共感が生まれるのではないか。

・企業でもオープンイノベーション2.0(社会との共創)が求められ、何が社会課題として求められているかを背景にイノベーションを考えるようになっている。テクノロジー・スタートアップでも生活空間に焦点を当てた新たな取組が増えている。イノベーションで重要なことは現地・現物・現実を踏まえること、そして社会の中での実践である。

・モニタリングという話があったが、線形に計画を立てPDCAを回すというやり方は非連続の時代では適切ではなく、むしろプロジェクトを実践しながら学んでいく、イノベーションはそうした進め方が求められるのではないか。

・企業の方と話をしていると、イノベーションに関してイスラエルへよく行っていると耳にする。同国ではテクノロジーベンチャーが集積している。シンガポールは国を挙げて戦略特区があり、自国の課題をオープンにし、イノベーションを通じて情報や人材、投資を呼び込む経済政策が一般化している。

・「人の和」は、この地域でどれだけポテンシャルがあるかまだ実感できていない。

・これからは社会空間・生活空間という視点が重要。その意味で、滋賀の業種は縦割的には多くの産業が集積しているが、果たして、これを横につなげていけるかどうか「人の和」

が求められよう。

・渋谷で産学連携の拠点でイノベーションを生む場づくりをお手伝いしている。アカデミア、企業、クリエイティブがお互いに「腹落ち」する交わりが生まれることを期待している。

・東京・大手町でも同様の取組をしているが、大企業だけではイノベーションは起きない。大企業に勤めながらも15時以降は別の仕事を行う。働き方改革とイノベーションは一体化して考えるべきという議論が出ている。いずれも従来の縦割りから横割りを生み出すことがポイントであり、地域と県を通じて他の地域または諸外国とつながることが大切。

・三方よしの近江商人は地域外に出ると近江商人と称された。地域外の産品を持ち帰ることを「登せ荷」というが、地域の産品を外に売るだけでなく外の情報や物事を集めてくる機能を果たしていた。広域的にこの地域にいろんな人に来てもらうためには県、大学といったプルーフ（中立的）セクターの役割がより重要になるのではないかと感じている。

（委員）

・長浜で金属加工を行っている。

・3年ほど前に、会社の理念を変更した。3つの柱の1つに社会的課題をビジネスで解決する社会的成長の視点を盛り込み取組を進めている。企業活動の中で社会、人間力の向上につながるよう関わっていく必要がある。

・ビジョンの印象であるが、10年は非常に長いという印象を受けた。当社でも数年スパンの計画を持っていたが、現在は3か月後等、スピーディーに取り組んでいる。2030年を目的・目標と目指すのであれば、中間目標を定量化していく必要があるのではないかと。

・見直すことも大切であるが、ビジョンの周知を図って多くの県民の行動につなげていく。共感のためには県民に腹落ちする内容であることが重要。

・個人的な関心ごとについてであるが、滋賀県の学生の教育レベルが問題になっているように感じている。大学生の県内就職率、学校と企業をつなぐ活動、産学官連携の実態を数値評価できる場所を捉えてやっていく必要があるのではないかと。

・12年の間に、2030年には学生から社会人へ変わるので、学生の実態や一貫した動きがどのように進化していくのかをみていく必要がある。

・労働人口の減少と後継者不足についても懸念材料である。現在中小企業の社長の平均年齢は67、68歳とされており、12年たてば80代と、男性の平均寿命と同じようになっていく。2030年には企業数が半減とのレポートもある。産業振興を進めて行く上で、企業を担う方がいなくなるとは元も子もない。

・教育も必要であり、どのように産業と教育との行政間での連携を行っていくのが大切。私も44歳であり、その先を案じるころ。

(委員)

- ・私は、地方創生で地域未来投資促進法を担当している。
- ・滋賀県は、地域未来投資促進法に基づく基本計画では、成長ものづくり分野、医療・ヘルスケア分野、環境・エネルギー分野、第4次産業革命関連分野、観光・スポーツ分野など、事業者がなにかをやりたいとなったときには全て支援できるような基本計画を作成されている。
- ・国のあらゆる省庁の補助金は、この基本計画に基づいて支援していく形になっていくと考える。各企業が、県の計画に基づき、中長期の計画的なものを法律の枠の中に落とし込んでいくと、補助金も交付されると言う流れであることは当面間違いない。
- ・サポイン（戦略的基盤技術高度化支援事業）という補助金制度は倍率が厳しいが、滋賀は全国でも採択率が高い。個々の事業者の取組に計画の段階からハンズオンで支援される体制が機能している。
- ・近畿レベルで滋賀を見たときに、ものづくりの滋賀、水環境関係の滋賀というのがわかる。企業で出る排水に関しては、滋賀はどの地域よりも気を遣い、自然に感謝し、水を処理している特徴がある。
- ・近畿管内で人口が伸びているのも滋賀。特に18～22歳人口はすごい。
- ・一方、22歳の大卒は京都、大阪や東京など地元以外に就職している。
- ・東京一極集中で東京に一番人口を供給しているのは大阪。その大阪には、もしかすると滋賀からたくさん人を供給しているかもしれない。
- ・地元就職する人口をどう増やしていくかが滋賀の今後の課題ではないか。
- ・また、京都の観光客を滋賀にうまく取り込めていないのではないか。

(委員)

- ・世界から見たら日本は羨ましい国であり、特に滋賀県は地の利、琵琶湖を中心とする観光資源が豊富であり、あまり困っている印象がない。
- ・滋賀は琵琶湖を中心にリゾート地としてやっていけるのに、大津駅は訪れたときに感動がない。琵琶湖の周りは汚らしく、また、のぼりの旗も多く、びわ湖ホールもあるのに興ざめた。
- ・滋賀県は恵まれているからこそ、若い人が憧れる貴重な場所になりうると思っている。憧れは「幸せを続ける」からくると思うので、「変わる滋賀」とあるが変わらなくても良いのではないかと思う。
- ・日本は、男女変わらず大学まで教育をしながら、女性は社会の中で稼がなくて良い、税金を払わないで家の中にいる不思議な国である。
- ・女性を働けるようにする。家にいる女性も情報は分かっている。そのような人に応えられる何かを生み出すことが産業的にも大切。
- ・産業的に大切なのは「水」と考えている。「水」に特化してはどうか。

- ・「水」で困っているところは世界で増えている。滋賀の試みを学びにくるようになれば波及していくのではないか。
- ・滋賀は京都の千年を支えてきている。伝統技術を続けていく、守り続ける形でお金を使っていたら、若い人が来るのではないか。
- ・日本はこれから女性が活躍しないととても追いつかない。そういう資源があるので女性の能力を使っていく。
- ・大学も立地しているので、女性が戦略を練るときに使えるような情報、人材やシステムを作ることが10年、20年で必要ではないか。

(委員)

- ・滋賀の魅力は湖。湖特化のブランディングをもっとした方が良い。
- ・SDGs や COP25 で、水不足が気候変動と同じレベルで注目されている。湖のある滋賀で世界中の水のスタートアップを集めて水に関するビジネスのプロトタイプができれば良いのではないか。
- ・今回策定されたビジョンは、全体的にすべてをよくしようというビジョンに見えた。
- ・スタートアップを生まれさせたいのであれば、中間総括に記載されている補助金を活用した後でどうするのかの視点が足りない。
- ・私は、滋賀、渋谷で活動し、また、ソーシャルイノベーションの聖地、世界中の社会起業家が集まる場所であるバリ島にも拠点がある。スタートアップが生まれる場所には、コワーキングスペースやアクセラレーションプログラムがある。
- ・滋賀県の長浜に引っ越してきて、チャレンジしづらさ、その地の先輩方が活躍している中でのやりづらさや、若手は後ろからついてこいというスタイルを感じた。
- ・滋賀県で新しい情報が入ってこない、情報が集約されていない、場所もないではスタートアップはやりづらい。
- ・また、モノに固執しない、定住しないことが当たり前になってきた若者に、定住しろということ難しい。
- ・シェアリングエコノミーではないが、新しいモノを生み出すことに価値を置き続けていることも、今の時代とは違うのではないか。
- ・物を売る・買うのではなく、形のないもの、サービスを売っていく時代でもある。滋賀には着物文化等、既存の素材があるのなら、それをどうシェアしていくか、分散させていくかという方向に考えた方がよいのではないか。
- ・事業は、続けることだけが美しいのではなく、新しいことも始めるのであれば、美しく終わることも選択肢に入れるべき。

(委員)

- ・前回のビジョン策定時に委員としてかかわった者として発言したい。

- ・世界に通用するブランドの発信というところが気になる。ビジョンでは、全体的にグローバルな意識が弱かった印象を感じている。
- ・「水・エネルギー・環境」では、バージョンアップした印象を受ける。
- ・「医療・健康・福祉」では、京都や大阪と比べると見劣りしている感じがある。
- ・「高度モノづくり」では、先ほど中国深圳の話もあったが、滋賀だけでアイデアを出したりカタチにするのではなく、京都もうまく活用すれば良いのではないか。次のモノづくりを考えたときに、人材を考えると、自分たちの地域だけでなく近隣地域も活用する必要がある。人材を滋賀に誘致することもありか考える。
- ・今まで滋賀県は企業や大学を誘致してきたが、時代は変わって、次は人材の誘致である。オープンイノベーションの話もあったが、今までの自分たちの考えの枠を捨てて、いかに外部の人材を活用するかという方向に持っていく必要があると強く感じた。
- ・京都がなぜ強いのか、観光を中心に世界に通用するブランド力があり、ブランド力の向上が人材を招いている。滋賀も言葉だけでなく力を入れるべきではないか。

(委員)

- ・弊社は滋賀県を中心にスーパーマーケットを展開しているが、目下の最重点課題は全産業の共通課題である「人手不足と高齢化」である。
- ・滋賀県は魅力がありながらまだまだ認知度が低い中で、知事が「天の時」とおっしゃるように、これから関西、滋賀で開催される全国的、国際的なイベントを通して、どのように滋賀の魅力を発信し、人を集めていくかについて検討する必要がある。
- ・ITの高度化によって、小売業も従来のようにただモノを仕入れて販売するだけでは商売として成り立たない。県内の人や企業のつながりをうまく活用して新しいサービスを生み出せるような環境整備についてもさらに進めていただきたい。
- ・滋賀県は長寿の県といわれるが、長寿というだけでなく健康であることが幸せの条件と考えると「健康しが」をどのように産業と結び付けて新しいサービスを提供していくかということについても考えていく必要がある。
- ・弊社のお客様は高齢者の方が多く、そうした方々に継続的に店舗に来ていただくためには、お客様の健康が何より重要と考えている。現在、お客様の来店時に健康を支援するようなサービス、例えば病気の予防や運動の機会の提案等ができないか検討を進めている。
- ・こうした健康に係わるサービスを考えるには企業だけではなく、病院や大学の協力が必要と考えており、産官学の連携がさらに促進されるように県として後押しをお願いしたい。

(委員)

- ・自治体として、そこに暮らす市民の人生をまるごとどう支えるか。
- ・4、5年前までは福祉の現場は福祉課や社会福祉課と言っていたが、今はくらし支援課

として意識とサービス提供の仕方を変えている。

- ・そこでどんなことが生まれているかといえば、結果として行政の力に限界があり、そこに暮らす集落や自治体にいる人にどのような力があり、どう発揮してもらうかを提案し、共感して一緒にやろうという気持ちになってもらっている。そういう仕組みをどんどん作っていききたい。

- ・本市では「地域お茶の間創造事業」に取り組んでいる。ほとんどの家が老々世代になってきており、集落や自治会にお茶の間を作ろうと呼びかけ、高齢者や子どもたちが集まって来ている。

- ・移動手段として、買い物困難や外出困難は現実の課題である。地域公共交通システムですら行政の課題であるが限界がある。民間のタクシー会社や地域の支え合いの乗合方式を作っていただくなど、問題はあるがお互い様の関係の中で運行をそれぞれの範囲でやっている。

- ・地域をどう支えるかと考えると、市民に動ける場所や働く場所を提供していくシステムがもっと生まれる必要がある。行政の限界があるところに民間企業や NPO が参入していくことで、新たなビジネスチャンスが生まれる。

- ・指定管理者では、公共施設を民間にお願いすることもしてきたところであるが、公共施設の管理だけでなく、新たなビジネスにつながっている。例えば、スキー場を運営している奥伊吹観光株式会社さんが運営しているグリーンパーク山東では、昨年度からグランピングやホテル事業を提供され、とても盛況で若い人たちもどんどん来ている。

- ・本業が木材処理会社であるヤマムロググループさんは、周辺が寂れてきたゴルフの打ちっ放し場の芝生を使い、子どもたちが利用できるフットサル場としてオープンし、新たな需要が生まれている。

- ・大沢ホールディングスさんでは、土を採っていた場所が荒地になっており、貸し農場として始めようと言われていた場所をローザンベリー多和田としてオープンされている。来春、テレビに放送されているイギリスの「ひつじのショーン」を中心とした新しい観光施設に生まれ変わる予定である。

- ・民間事業者さんこそ地元をよく知っている。どのような事業をすれば良いのか誰よりもわかっているので力を発揮できる。

- ・民間事業者がもっと自由にビジネスができる環境を作ることが行政の役割と思っている。

- ・また、これからは、農業、林業が問題で極めて深刻な状態である。

- ・当市は、地域おこし協力隊を募集した。昨年3名応募があり、若い方ばかりで県外から来られた。皆さん林業だけで食べていけるとは思っていないが、林業を生涯の仕事としながら自然の中で暮らしたいと思われている。若い人たちの働く場や働き方、暮らし方をこのようにすればできるという成功事例を作っていくため、3名の方を応援しており、行政の大きなテーマであると思っている。

- ・2019年9月に米原駅の東口に総合庁舎を着工する。合わせて滋賀銀行やみずほ銀行含め、

駅前を新しい市街地にしようとしている。民間の提案でようやく基本計画ができあがったところ。

- ・また、規制を緩和していく必要があるのではないか。
- ・例えば、農業分野にもっと AI を入れ、新しい農業生産拠点を作りたいと計画している。新しい農業形態として、農福連携で障害を持った人が農業に参入できるよう、新しい事業を展望している。
- ・産業振興の中に、是非、農業、林業を取り入れてもらいたい。

(委員)

- ・世界的に「ローカル」がキーワードになっていると感じている。京都や東京は人が多く、欧米人は人ごみを嫌う人が多い。世界的に有名な人ごみの多い京都から 25 分くらいで米原に来ることができる。
- ・滋賀県の良さや地域の魅力、ストーリーを発信するような人が必要であるが、今まで誰もしてこなかった。そのため、自分が米原を拠点に外国人観光客を案内する事業を計画した。
- ・行政の仕事において、1 つ欠けている視点は観光客目線である。世界的に滋賀の知名度はない。調べてまで滋賀のここに行こうというのはなかなかない。滋賀のストーリーを説明するプレイヤーが活躍していないところが京都等との違い。
- ・滋賀県＝琵琶湖のイメージである。琵琶湖を中心に産業が生まれてきており、歴史や文化が環境や SDG がつながっているというストーリーを作れば、世界中の人々に来ていただけ、感動を与えられるのではないか。
- ・滋賀県の立ち位置が明確でない。お金を出して滋賀に行こうというのは現状では難しい。
- ・米原は滋賀のあちこちの地域に行くための拠点としての重要な役割がある。

(副会長)

- ・事業家や企業家等、企業経営から見ると 1～2 年先しか読めないのが現状で、2030 年の目標と言われてもピンと来ないとの時間軸の問題を指摘された。そしてまた、企業経営では必ず数値目標がある一方、県政のビジョンでは目標でなく目的やビジョン、企業で言えば企業理念として捉えた方が分かりやすいのではないか。目的と目標の違いを踏まえた方が良い。
- ・いろいろな人材育成等の指摘もあった。
- ・基本構想でも触れているが、滋賀経済同友会は、「滋賀戦略的 CSR 経営モデル 2030」をこの 3 月に発表した。「企業基点」ではなく「社会基点」から何が求められ、何ができるのかを企業が考えるように提言している。
- ・SDGs も、滋賀経済同友会では 17 の目標のうちできるものからやろうと宣言する「SDGs 宣言企業」を行おうと考えている。

(会長)

- ・今のビジョンの期間があと5年ということであり、10年間のうち残りの5年を見直すのか、2030年をターゲットとしていくのかを今後皆さんで議論していく必要がある。
- ・産業は、狭義のものづくり、広義の農業、林業含めた定義がある。モノづくりだけでなく、サービスを含め、トータルで議論していく必要がある。
- ・人づくりもポイントである。大学が担っているが、小学校や中学校は学力が低く、他県から入りにくいという話も聞いている。それも含めて整理して次回から議論できたらと思う。

(5) その他

(事務局)

- ・先ほど、説明させていただいたとおり、次回の会議は3月中の開催を予定している。
- ・年度末の大変お忙しい時期ではあるが、ご出席をよろしく願います。
- ・また、多様な委員の皆さまがおられるので、今回はぜひ、委員の皆さまから取り組んでいらっしゃることを含め、10分程度、3人程度の方々に話題提供のプレゼンテーションをいただければと考えている。
- ・また、本日は限られた時間であったため、十分にご意見を伺えなかった点もある。本日、ご発言いただけなかったご意見やご提案などございましたら、どのような書式でも結構ですので、メールやFAX等で事務局あてお送りいただきたい。

(会長)

- ・それでは、皆様よろしく願います。
- ・ただいま事務局から報告があったとおり、次回の会議は3月を予定している。皆様お忙しい方ばかりですので、ご出席に協力いただくようよろしく願います。
- ・それでは、これをもちまして議事を終了させていただく。
- ・委員の皆様には議事進行にご協力いただき感謝申し上げます。
- ・それでは、進行を事務局にお返しする。

■閉会

(司会)

- ・それでは、閉会にあたりまして商工観光労働部長の江島より一言お礼を申し上げます。

(商工観光労働部長)

- ・熱心に御意見、御議論いただき、感謝申し上げます。いろんなキーワードをいただいたと思っっている。

- ・知事が、「天の時」、「地の利」、「人の和」を申し上げたがそれを引き継いだ話、「2025年の崖」とそれへの対応のための「デジタルトランスフォーメーション」の話、大企業だけではイノベーションは起きないといった話があり、滋賀県は99.8%が中小企業であるのでイノベーションを起こしていくのは中小企業であると感じた。
- ・また、「変わる滋賀、続く幸せ」を目指す知事の発言があったが、滋賀県は豊かであるので、変わらなくても続く幸せを目指せばよいのではといった議論もあった。いかにその良さを活かしていくのがポイントであると思われる。
- ・チャレンジしにくい土地柄という指摘もあった。開業率が低いのはまさにその表れであると思われる。価値観の方向転換が必要であると思われる。
- ・民間が自由に動けるようにするのは行政の役割との話もあり、規制緩和も行政の仕事と感じたところ。
- ・そしてSDGsの話もあった。滋賀県は近江商人の「三方よし」もあり、SDGsに近い視点を持っていたと思われる。
- ・本日賜ったご意見を踏まえ、次回、3月に次の段階に進めていきたい。
- ・滋賀県が将来にわたって力強く発展させていただくことができるよう、よろしく願い申し上げる。

(司会)

- ・それでは、これもちまして第1回滋賀県産業振興審議会を終了させていただく。